

年間第 17 主日 (ヨハネ 6:1-15)

あなたがいてくだされば、絶望の中でも希望を持てます



(訳あって、2009年原稿を再掲) 今週は、ヨハネ福音書による「五千人に食べ物を与える」という奇跡の物語で、四つの福音書ともに出来事を残しているわけですが、他の福音書の書き方とはっきり違いを見せています。共観福音書では、パンの奇跡が行われた場所は「人里離れた場所」とされていますが、ヨハネは出来事が山でおこなわれたとしています。

この「山」という表現ですが、かつて山で行われた出来事と、今回の出来事を重ねて考えてみなさいと言いたくて、「山」という場所を用いているようです。

「かつて山で行われた偉大な出来事」とは何でしょう。イスラエル人が真っ先に考えるのは「十戒の出来事」でしょう。神はモーセを通じてイスラエルの民に十戒を授けました。民はこれを守り、それによって神が民を守り、救うというものです。

ですから、イエスが五千人に食べ物を与えるという奇跡を「山」でおこなったという書き方をヨハネがしているのは、かつての山での出来事を思い出ささい。神が十戒を与えて民を守り、救うと約束したように、今イエスも、あなたたちを守り、救う約束としてパンを与えているのですと言いたいのです。

ヨハネが描くパンの奇跡に見えるもう一つの特徴は、この出来事を「しるし」として示している点です。パンを食べさせてくれたのは、かつて十戒を授けてくれた神に私たちの目を向かわせたように、イエスもまた、神の子として私たちの救いのためにこの偉大な出来事をなされたのだと気づいて、神をたたえるべきだったのです。

ところが、群衆が取った行動は、イエスをこの世の王に仕立てようとする態度でした。この世の王は、人々を支配する存在です。救いを与えるのではなく、支配のもとに人々を置くに過ぎません。支配ではなく、神に守られ、愛されている喜びを持ちながら生きるために、奇跡をしるしとして用いたのです。

さて、このようなヨハネの理解を踏まえて、パンの奇跡の出来事をふり返ってみましょう。イエスは、フィリポに尋ねます。「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか。」(6・5) イエスはひとまずそばにいた弟子に尋ねています。弟子に何かを気づかせるためにほかなりません。

フィリポは置かれている状況が絶望的であることには気づいたようです。「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう。」(6・7) シモン・ペトロの兄弟アンデレも、何かはあるけれども、何かがあるだけで何の役にも立たないだろうと決めてかかっています。「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たない

でしょう。」 (6・10)

この状況は、きっと私たちの状況を指しているのだと思います。さまざまなことが、希望の持てない状況です。そこへ、イエスは見落としている大切なことを指摘します。絶望的な状況だけれども、わたしがそばにいるのを忘れてはいないか。何の役にも立たないくらいしか手持ちがないけれども、その役に立たないほどわずかのものを活かすことのできるわたしがいるではないか。そのことをイエスは、当時の弟子たちにも、私たちにも言いたいのではないのでしょうか。

私たちは、イエスが示す奇跡をきちんとするしとして読んでいるのでしょうか。私が抱えていた絶望的な気分は、イエスがそばにいることを忘れていたことで生じていたのではないのでしょうか。イエスは今も、私たちに「この絶望的な状況を、どうしたら打開できるだろうか」となぞかけをしているのではないかと思っています。

それに対して「もちろん、あなたがそばにいてくだされば、きっと解決できます」と答える準備をしておきましょう。その答えを、イエスは今か今かと待っておられるのではないのでしょうか。

年間第 18 主日(ヨハネ 6:24-35)